

# 大学生の自閉スペクトラム症傾向に伴うコミュニケーションの問題へのメタ認知の応用 [論文要旨及び審査の要旨]

著者	前田 由貴子
発行年	2020-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第781号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020210">http://hdl.handle.net/10112/00020210</a>

[25]

氏名	まえだ ゆきこ 前田 由貴子
博士の専攻分野の名称	博士（心理学）
学位記番号	心博第34号
学位授与の日付	2020年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	大学生の自閉スペクトラム症傾向に伴う コミュニケーションの問題へのメタ認知の応用
論文審査委員	主査教授 串崎 真志 副査教授 脇田 貴文 副査教授 佐藤 寛（関西学院大学）

## 論文内容の要旨

本論文では、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD）傾向の高い大学生が抱えるコミュニケーションの問題に対して、メタ認知および認知の柔軟性の要因が関連することを明らかにし、彼らのコミュニケーション・スキルの向上を目標とした心理教育的な介入に関する基礎的研究を行った。

本論文は7章から構成されている。第1章では、研究の背景として、ASD傾向の高い大学生の現状を概観した。また第2章・第3章では、ASD学生のコミュニケーションとメタ認知に関する先行研究を概説した。第4章では本研究の目的と意義を述べ、続いて第5章では、ASD傾向の高い大学生のコミュニケーションに対するメタ認知の影響を調査した。第6章では、ASD学生を対象としたメタ認知トレーニングの介入研究を報告した。そして第7章では総合考察を行った。

要旨は以下の通りである。

第1章では、ASD者が抱えるコミュニケーションの問題を概観した。それは生活スキル、友人関係、学業などの様々な場面に影響を与え、学業不振や二次障害、雇用問題などに結びつく。このような不適応の状態は、ASD傾向の高い大学生にもみられる。そこで【研究1】では、ASD傾向の高い大学生の実態を把握する調査を行った。大学生662名（男性302名、女性360名）を対象に、自閉性スペクトル指数10項目版（AQ-J-10: Kurita et al., 2005）を実施した結果、カットオフポイント（7点）を超える得点を示した学生が、全体のうち63名

(9.8%) いることが明らかになった。続く第2章・第3章では、ASD者のコミュニケーションの問題に、メタ認知および認知の柔軟性（の低下）が関連する可能性を論じた。

第4章では、本研究の目的と意義を述べた。すなわち、第一にASD者のコミュニケーションの問題に、メタ認知および認知の柔軟性が関連することを明らかにし、第二にASD傾向の高い大学生を対象として、メタ認知トレーニングの介入の効果を検討することであった。

第5章では、ASD傾向をもつ大学生のメタ認知とコミュニケーション・スキルの関連を検討するため、2つの調査を行った。【研究2】では、大学生453名（男性303名、女性150名）を対象に、AQ（Autism-spectrum Quotient）日本語版（Baron-Cohen et al., 2001; 若林他, 2004）、ENDCOREs（藤本・大坊, 2007）、成人用メタ認知尺度（阿部・井田, 2010）を実施した。構造方程式モデリングによって、ASD傾向がコミュニケーション・スキルに直接向かう経路と、メタ認知を媒介する経路を仮定したモデルを検討した結果、両方の経路が有意であった。すなわち、ASD傾向の大学生が抱えるコミュニケーションの問題には、メタ認知が介在している可能性が示された。

【研究3】では、大学生229名（男性110名、女性117名、不明2名）を対象に、自閉性スペクトル指数10項目版（AQ-J-10: Kurita et al., 2005）、改訂Cognitive Fusion Questionnaire 13項目版（嶋他, 2016）、ENDCOREs（藤本・大坊, 2007）を実施した。AQ-J-10の合計得点を説明変数、認知的フュージョン（思考内容と現実の混同）、脱フュージョン（思考内容と現実の弁別）を目的変数とする重回帰分析を行った結果、ASD傾向の高い学生は、ASD傾向の低い学生に比べて自己の思考に囚われやすく、コミュニケーションの問題をかかえやすいことが示された。

第6章では、最初に青年期から成人期のASD者を対象とした社会的スキル訓練（Social Skills Training, 以下SST）の研究を概観し【研究4】、介入の般化を促進する変数として、メタ認知が重要であることを指摘した。続いて【研究5】では、ASD傾向の高い女子学生を対象に、メタ認知トレーニング（Metacognitive Training, 以下MCT; Moritz et al., 2012）を実施した。介入プログラムは講義形式で、MCTの8つのモジュール（石垣, 2016）を参考に、2週間に1回、30分から40分×6セッションで構成された。AQも含めた測定指標をプレ期（5月、介入直前時点）、ポスト期（7月）、FU（follow up）期（以下FU期、10月）の3時点で実施した結果、ASD傾向の高い群は、フォローアップ時にコミュニケーション・スキルが向上し、ASD傾向の低い群は、介入直後にメタ認知が改善した。

さらに【研究6】では、男性を含めた少人数のグループでMCTの効果を検討した。大学生33名のうち20名（男性6名、女性14名）を介入群、13名（男性5名、女性8名）を対照群とし、MCTを実施した結果、ASD傾向が低い場合に、介入群は対照群に比べてコミュニケーション・スキルが改善することが示された。

第7章では、総合考察を行った。本論文の結果、ASD者のコミュニケーションの問題に、メタ認知および認知の柔軟性が関連していた。また、メタ認知トレーニングがASD傾向の

高い女子学生と ASD 傾向の低い大学生のコミュニケーション・スキルを向上させる可能性が示唆された。最後に、ASD 傾向の高い大学生の今後の支援について考察した。

## 論文審査結果の要旨

本論文の特徴は、(1) 自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) の診断をもたないが ASD 傾向の高い大学生という、これまで研究が少なかった対象に焦点を当てている点、(2) 彼らの特徴を、メタ認知や認知的フュージョン (認知の柔軟性の低下) という要因から考察した点、(3) 彼らに対する心理教育的な介入 (メタ認知トレーニング) の効果を検討した点にある。また、(4) 今後の大学生支援にとって示唆の大きい基礎的・実践的研究であることも特筆できる。

以下に、心理学研究科が定める博士学位論文審査基準 (課程博士) に従って、審査委員の見解を述べる。

### 1. 問題意識が明確で、課題設定が適切であること

ASD 傾向の高い大学生が抱えるコミュニケーションの問題に対して、メタ認知および認知の柔軟性の要因を検討するという問題意識が明確である。ASD 傾向の大学生の実態を把握したのちに、メタ認知とコミュニケーション・スキルの関連に関する調査、そして心理教育的な介入の効果を検証するという、課題の設定および研究の流れも適切である。公開口頭試問においても、このことを確認し、さらに ASD の概念の定義や変遷について専門的な議論が行われた。

### 2. 国内外の先行研究を適切に検討、吟味していること

国内外の先行研究を幅広く詳細に読み込んでおり、ASD 者のコミュニケーションや介入プログラムに関する深い知見をもっている点が評価できる。公開口頭試問においては、自閉性スペクトル指数を用いた研究や、メタ認知の概念の定義等について専門的な議論が行われた。

### 3. 研究目的に照らして研究・分析の方法が適切であること

全体として、研究目的に照らして適切な研究計画で実施、分析している。特に、ASD 傾向の高い大学生に関する実態調査に関して評価できる。また、ASD 傾向の高い大学生に対する介入研究は、細心の注意を払って進めていることが窺える。公開口頭試問においては、メタ認知トレーニングの内容や意義について確認し、尺度構成や統計処理及び解釈に関する質疑がなされ、介入に関して十分な結果を得られなかった点について、踏み込んだ議論が行われた。

#### 4. 論文構成が的確で、論理的展開に整合性、一貫性、説得性があること

論文構成は全体としての的確であり、課題設定にしたがって、適切な順序で研究を展開しており、論理展開も整合的である。公開口頭試問においては、誤字や形式的な誤りが指摘され、総合考察の分量がやや少ない点について、いくつかの訂正と補足説明がなされた。

#### 5. 全体を通して学術的な独創性が認められること

繰り返しになるが、本研究は、ASD の診断をもたないが ASD 傾向の高い大学生に焦点を当てた点、それをメタ認知や認知的フュージョン（認知の柔軟性の低下）の要因から考察した点で、高い学術性と独創性を有すると評価できる。

#### 6. 国内外の学会や社会に対して貢献が認められること

本論文は、臨床的な問題意識と実践を背景にもち、発達障害をもつ大学生の今後の支援に関して、大きな貢献が認められる。

以上のように、一部に問題点もみられるが、それは本論文の価値を低くするものではない。調査研究を重ね、介入研究によって実践的な示唆を得たことは、博士論文審査基準からみて適切だと判断できる。よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。